



「社会」の領域について

三 木 安 正

新教育要領の「社会」の領域について具体的な問題を示せということであるが、私どもは現場で子どもたちに接するということをしていないので、適切なことは書けそうもない。

しかし、具体的にといっても、「社会」の領域のなかには、いわゆる「社会性」的なものと「社会科」的なものとが混在しているので、こうしたものをどう考えるかということなどはまずはっきりしておく必要がある。

「社会性」的なものと「社会科」的なものとが混在しているということは何らかの必然性があるのか、それとも単に文字が似ているために便宜的に一緒にしてあるのかということをもまず考えてみる必要がある。

幼稚園教育と小学校教育との一貫性ということがよく問題になる。そしてその際幼稚園の「社会」は小学校の「社会科」に、同じ

く「言語」は「国語」に、「自然」は「理科」に直結するというように考えている人があるが、これはきわめて表面的な考え方であって、幼稚園教育の本質をとらえていないといわざるを得ない。

もちろん、年少時の段階で「社会性」的なものと「社会科」的なものとを峻別することはできないと思うし、小学校の「社会」でも低学年では「社会性」的なものがかかなり多く学年がすすむとともに「社会科」的なものになっていく。本来「社会性」的なものは「教科」の枠の中で扱うよりも、集団生活の中で養われるべきものであり、小学校の教育課程でいえば、その四つの「領域」（幼稚園でいう「領域」とは別の意味でつかわれる）すなわち、教科、道徳、特別教育活動、学校行事などの中で教科以外の三つの領域で養われることが多いはずである。ところが、現在の小学校教育では、四つの「領域」ということが設定されていながらも、結局は「教科偏重」

であるために、教育の基礎としてどうしても必要な「社会性」の養成を「社会」の中に入れておかねばならなかったのである。
う。

つまり小学校教育が教科偏重でなくなり、特別教育活動などにもっと本腰がいれられるようになれば「社会性」的なものは教科としての「社会」からははずしてよいわけである。

これに対して、幼稚園教育では、子どもの発達段階から考えて、「社会科」的な知識を高め理解を深めるというよりも「社会性」的な方面を培うことが、より大切である。つまり、子どもたちは家庭という殻から出て、同年輩の仲間との集団生活に入っていくことによって精神も肉体も成長して行く時期にあるので、この時期での教育の基本は「社会性」を育てることにあり、その上に思考も言語も、その他の表現活動も発展し、健康も増強されて行く。

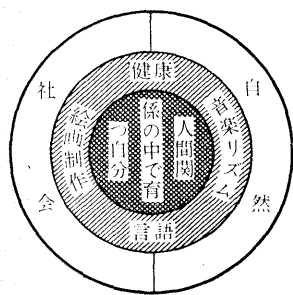
このように考えると、幼稚園の「社会」は小学校の「社会」に直結するようなものではないことがわかってこよう。

ところで、小学校の教育課程の編成が、教科、道徳、特別教育活動、学校行事の四つの領域によって編成されるということになっていくのに対し、幼稚園では、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六つの領域によって編成されることになっている。ということは、小学校の「教科」と幼稚園の「領域」とがその性格を異にするということを示すとともに、そのちがい方について、幼

稚園の領域の中には、教科的なもの、道徳的なもの、特別教育活動的なもの、学校行事的なものが未分化な形で混ぜ合わされているものと考えられることもできよう。

つまり、幼稚園の「領域」は習得さるべき知識・技能を組織化したというだけのものではなく、そういうものを習得する働きをもつ「人」をつくる営みを便宜的にいくつかに分けたものということができよう。いいかえれば人間の機能と人格を育てるための指導領域ということができる。

そこで、幼稚園教育の六つの領域は、身体的精神的諸機能が発達し「自分」というものが外界の中で、とくに人間関係の中で拡大して行くために、役立つ経験を調整して与えて行くためのものとするれば、それらは図のような関係で示すことができると思う。この図で健康とか言語とかの文字の位置には何らの意味はない。健康も言語も、音楽リズムも絵画製作も自



分についたものであり、自分の外にある自然や社会との交渉の手段ともなるものであるということを示しているのにすぎない。そして、その自分とは、他人との関係、集団との関係において成長しつづけているものであり、言語

も、音楽も、健康すらもそうした社会的成長を基盤として、習得され発展していることを示しているのである。

そこで、幼稚園教育の領域の一つである「社会」は、子どもたちにその発達に則した生活の仕方を指導して行くこと、(図の中で影をした部分)と、子どもたちが生活をして行くべき社会に関する知見を与えることとの二面が便宜上一つにくられているのであり、幼稚園の段階では前者の方により重点がおかるべきである、ということがいえよう。

そこで、この両者について、いくつかの問題をひろってみよう。

新指導要領では、「社会」の内容は

- 1、個人生活における望ましい習慣や態度を身につける
- 2、社会生活における望ましい習慣や態度を身につける
- 3、身近な社会の事象に興味や関心をもつ

という三つの柱で示されている。

これは、上述の考え方からみれば、1と2は「社会性」的なものであり、3は「社会科」的なものということができる。そして外見的にいえば、前者と後者との比率は二対一となっている。そして、1は特に「個人生活における」ということであり、「社会科」的なものとはかなり離れたものであるが、幼稚園教育での「社会」が「社会性」を養うことを基本と考え、しかもその基礎を培うということからいえば「個人生活」にまでさかのぼらなければならない

ということになるのであろう。

ここで、社会性を養うためには個人生活における自立性、自律性乃至は自主性が養われなければならないという考え方が示されたことになり、その指導上の留意点として、「特に家庭との連絡を密にし、幼児の年令や発達の程度に応じ、適切な機会をとらえて、個人生活における基本的な習慣や態度を身につけ、しだいに自主および自律の精神の芽ばえをつちかうようにする」としているわけである。

この点は、今後の幼稚園のあり方の一つとしての家庭教育に対する指導的役割の問題として検討されるべきものであろう。

それとともに、1の細目をみると「明るくのびのびと行動する」とか「遊びや仕事を熱心にし、最後までやりとおす」といったような精神の健康状態のもたらしめるものがあげられていることに注目すべきであろう。「物をたいせつにする」とか「規律のある生活をする」とか「よい悪いを区別できるようになり、考えて行動する」とかは、そうした精神の健康の上に求められるものであって、単なる「しつけ」とか旧式の道徳とかで教えこむべきものではないと思う。そのように考えると、現在の子どもたちの家庭とか社会とかの生活環境が大きな問題として考察されなければならないわけである。

次に、2については、幼稚園という集団教育での指導に大いに期待される点であり、またすでに実績をあげている点でもあるが、こ

ここに示されているねらいは、よいこと、望ましいことがならべてあるので、これらを金科玉条として「よい子教育」をしていったのは目的を達することはできないかもしれない。一般に教育目標をかげようとすれば、ただただよいことをならべるようになってしまったのであるが、それを遵守して、「悪いことをしてはいけません」「喧嘩はいけません」「お行儀をよくしなければいけません」といったことばかりいつていたのでは子どもは決して正しくたくましくはならないであろう。

よいことをする態度をつくるためには、悪いと思われることをどのようにコントロールするかということが問題なのであって、そのためには、いわゆる問題行動と正面からとりくんで、その指導の要諦をつかむということが必要なのだと思う。

昨年の九月に幼稚園教育課程の改善について教育課程審議会が文部大臣に答申したものの中に、「……そして、将来、物事を深く考え実行力のある人間に成長するように配慮しなければならぬ」とある幼稚園教育に対する期待にこたえるためにも、集団生活を通じて個々の人格がみががれてゆく過程に目を向けて行くことが大切だと思う。

次に、3の内容については、従来、前記の1・2の内容について考えられてきたほどにはよく考えられてこなかったと思う。何かやろうとすれば小学校の社会科と同じようなことをやってしまうこと

になったのではないかと思う。

それは、結局、幼児の精神的発達の過程において、彼をとりまく社会的事象に対して、どのような関心をもたれて行くかというようなことについての研究が不足しているということであろう。

3の(1)には「幼稚園や家庭でみんなが助けあっていることを知り、感謝の気持ちをもつ」とあるが、これは、おとなであるわれわれが、そうしたことについて感ずるように、幼児たちが感ずることを期待することはできないと思う。「助けあっている」などということがどういうこととして幼児たちに把握されるのか、「感謝の気持ち」というものが、「どうもありがとう」という子どものことばの中にどのように入っているのか、などなどと考えて行くと分っていないことのみといわなければならない。

「自分たちのために働いている人」とか「人々のために物を造っている」とかいうのはただ「働いている人」がいるとか、「物を造っている」ことを知るとかいうことよりも、もう少し、そのことの社会的意味を知ってもらいたいという気持ちがこめられているのであるが、これらのことが幼児期ではどのように理解されるのか、あるいはまた、そうしたことは小学校にいつから分ればよいのか、そうした教育心理学的な問題は、ほとんど手がつけられていないといってもよいのではないだろうか。